

筒形銅器の副葬とその背景

岩 本 崇

はじめに

筒形銅器は、これまでに日本列島において40基あまりの古墳から70例ほどが出土している。また、ほぼ同数の資料が韓半島南部地域で集中的に確認されており、古墳時代前期から中期にかけての日韓交渉を考えるうえで有効な考古資料と位置づけられる。

現在までに出土した筒形銅器はいずれも墳墓においてみいだされており、副葬品としての性格を有するものであったとみなしうる。筒形銅器が副葬品としての性格をもつのであれば、副葬に至るまでのその使用時の姿が、最後の使用状況を示す墳墓での出土状況に反映される可能性は決して低くない。先学によって、出土状況が筒形銅器の用途や機能を考えるうえでの数少ない材料とされてきたのは、こうした理由にほかならない。

今日、筒形銅器の出土状況にかんする情報は調査例の増加にともなって、以前に比べるとずいぶん豊富になった。それは日本列島の出土例に限らず、韓半島の例においても同様である。このたび報告された滋賀県定納1号墳も、筒形銅器副葬のあり方を考える際の貴重な一例となるであろう。

本稿では筒形銅器の出土状況をあらためて整理し、その類型化を試みる。筒形銅器の副葬配置に一定の約束をみいだせるのであれば、そこには共通した背景の存在を予想できるし、細かなとりあつかいの異同があれば、また別の解釈を提示することも可能となるはずである。副葬配置の類型化を試み、その類型が共有された背景、あるいは逆に差異が生じた背景を検討することは、筒形銅器の性格を考えるうえで必要不可欠なのである。そのうえで、出土古墳の様相などを含めた副葬にかかわる諸現象を整理し、筒形銅器が墳墓におさめられた背景の一端に迫ることとしたい。

1 研究史

分析に移る前に、筒形銅器副葬の意義にかかわる先行研究の論点を整理しておきたい。筒形銅器の用途と機能にかんする研究と、筒形銅器の流通のあり方を追求する研究に大別し、それぞれの論点を概観する。

用途と機能にかんする研究 鳥居龍蔵は考古学史上で筒形銅器にたいしてはじめて言及し、その用途を剣の把と推測した（鳥居1888 256頁）。高橋健自も香川県石清尾山猫塚古墳での銅剣との共伴を手がかりに、目釘孔を用いて筒形銅器と銅剣を留めたと考えた。しかし、いっぽうでこの想定にもなお吟味が必要であることを強調した（高橋1910 66頁）。末永雅雄も石清尾山猫塚古墳例を重視して、筒形銅器を剣把と推定した（末永1941）。

たいして梅原末治は、関連資料やその形態的特徴を考慮して、剣把にくわえてヤリ⁽¹⁾の石突でもあった可能性を示した（梅原1921）。森本六爾もこの見解について関連資料をまじえながら検証した（森本1929）。さらに村井崑雄も、形態的特徴や出土状況から筒形銅器を石突の一種と考えた（村井1956）。

筒形銅器が武器の一部をなすという見方に異論をとねえたのは、小林行雄である。小林は筒形銅器の形状が武器としては華奢であることから武器説に否定的な見解を示し、装飾的な器物の柄に付属するものと推定した（小林1951 108頁）。また、透かしの存在や青銅製舌を内部におさめる点から、音を鳴らすという機能をもつことも指摘した。（三木・小林1959 115頁）。大塚初重も、岡山県金蔵山古墳で埴製合子から筒形銅器が出土した点を考慮するとともに、内部に青銅製舌や管玉をおさめる例の存在から、響音機能を備えた杖頭をな

表3 古墳出土の

No	古 墳 名	所 在 地	出土 点数	墳 丘		埋葬施設	山田分類	岩本分類
				形 態	規模(m)			
1	〔伝〕上野	—	〔1〕	—	—	—	Ⅱ	C?
2	熊野神社古墳	埼玉県桶川市	1	円墳	45	粘土槨	Ⅲ	A
3	川柳將軍塚古墳	長野県長野市	2	前方後円墳	93	竪穴式石槨	Ⅲ 2	B' ? 1 / 不明
4	三池平古墳	静岡県静岡市	2	前方後円墳	68	竪穴式石槨	Ⅲ 2	A 2
5	〔伝〕根堅向野10号墳	静岡県浜松市	1	円墳	—	横穴式石室	Ⅱ	B'
6	〔伝〕御蔵上古墳	静岡県三島市	〔2〕	—	—	不明	不明	不明
7	稲荷山古墳	福井県福井市	1	円墳	36	木棺直葬	Ⅱ	B'
8	〔伝〕小牧	三重県四日市市	1	—	—	—	Ⅲ	A
9	安土瓢箪山中央石槨	滋賀県安土町	2	前方後円墳	162	竪穴式石槨	Ⅱ 1、Ⅱ or Ⅲ 1	A 2
10	定納 1 号墳	滋賀県近江町	1	前方後方墳	21	木棺直葬	Ⅱ	A
11	谷畑古墳	奈良県榛原町	1	円墳	27	木棺直葬	Ⅲ	B
12	タニグチ 1 号墳	奈良県高取町	2	円墳	20	粘土槨	Ⅱ 2	A 1 / 不明 1
13	西浦古墳	奈良県御所市	1	円墳	24	粘土槨	Ⅱ	A
14	池ノ内 5 号墳第 3 棺	奈良県桜井市	1	円墳	15	木棺直葬	Ⅱ	不明
15	新沢500号墳副槨	奈良県橿原市	5	前方後円墳	62	粘土槨	Ⅱ 1、Ⅲ 3、Ⅳ 1	A 5
16	城山 2 号墳	奈良県香芝市	1	円墳	20	粘土槨	Ⅱ	B
17	斑鳩大塚古墳	奈良県斑鳩町	1	円墳	35	粘土槨	Ⅳ	C
18	〔伝〕中巖古墳	京都府園部町	〔1〕	前方後方墳	64	—	不明	不明
19	尾塚古墳	京都府藤井寺市	2	方墳	40	粘土槨	Ⅱ 1、Ⅳ 1	B 1 / B' 1
20	穴太古墳群中	京都府亀岡市	1	円墳?	—	—	Ⅱ	C?
21	美濃山王塚古墳	京都府八幡市	1	円墳	60	粘土槨	不明	不明
22	〔伝〕南山城	京都府	1	—	—	—	Ⅲ	A
23	妙見山古墳前方部西側	京都府向日市	1	前方後円墳	115	—	Ⅲ	B
24	カジヤ古墳第 1 主体	京都府京丹後市	1	円墳	73	竪穴式石槨	Ⅱ	A
25	盾塚古墳	大阪府藤井寺市	1	帆立貝形古墳	64	粘土槨	Ⅱ	B
26	東車塚古墳	大阪府交野市	1	前方後方墳?	50	木棺直葬	Ⅲ	C?
27	〔伝〕赤塚山	大阪府枚方市	1	—	—	—	Ⅲ	B
28	紫金山古墳	大阪府茨木市	1	前方後円墳	110	竪穴式石槨	I	A
29	〔伝〕岩橋	和歌山県和歌山市	1	—	—	—	Ⅲ	A
30	松田山古墳	兵庫県太子町	1	—	—	竪穴式石槨	Ⅱ	B
31	〔伝〕勢見山古墳	徳島県徳島市	1	前方後円墳	—	竪穴式石槨	Ⅱ	A
32	〔伝〕石清尾山猫塚古墳	香川県高松市	3	双方中円墳	96	竪穴式石槨	Ⅱ 2、Ⅲ 1	A 2 / B 1
33	吉岡神社古墳	香川県丸亀市	1	前方後円墳	52	竪穴式石槨	Ⅳ	B' ?
34	吹上の森 1 号墳	愛媛県伊予市	2	前方後円墳	40	—	Ⅲ 2	B 2
35	高岡山 1 号墳	高知県宿毛市	1	円墳	18	礫槨	類外	A
36	金蔵山古墳中央石槨	岡山県岡山市	2	前方後円墳	165	竪穴式石槨	I 重 1、Ⅱ 重 1	B 2
37	浅川 3 号墳	岡山県岡山市	1	円墳	7	組合式石棺直葬	Ⅱ	B
38	郷原古墳	岡山県	1	—	—	—	Ⅲ	B
39	〔伝〕四つ塚 1 号墳	岡山県真庭市	1	円墳	27	横穴式石室	Ⅱ	A
40	岡高塚古墳	岡山県勝央町	1	前方後方墳	51	竪穴式石槨	Ⅲ	A
41	大迫山 1 号墳	広島県庄原市	1	前方後円墳	45	竪穴式石槨	Ⅱ	A
42	〔伝〕馬場谷 2 号墳	広島県三原市	1	円墳	15	粘土槨	Ⅲ	B?
43	龜山 1 号墳	広島県神辺町	1	円墳	28	粘土槨	Ⅲ	B
44	三玉大塚古墳	広島県三次市	1	帆立貝形古墳	41	竪穴式石槨	Ⅲ	不明
45	長光寺山古墳	山口県山陽小野田市	1	前方後円墳	62	竪穴式石槨	Ⅱ or Ⅲ	A
46	西浦山古墳	鳥取県鳥取市	1	円墳	10	—	Ⅲ	B
47	生山29号墳	鳥取県鳥取市	1	円墳	20	竪穴式石槨	Ⅲ	A
48	山地古墳第 1、第 2 主体	高根県出雲市	各1	円墳	24	木棺直葬	Ⅱ 1、Ⅲ 1	A 2
49	立野10号墳	福岡県甘木市	1	方墳	9.5	組合式石棺直葬	Ⅲ	B
50	横田下古墳 2 号石棺	佐賀県唐津市	1	円墳	30	横穴式石室	Ⅱ	A
51	清水甲古墳	熊本県宇城市	1	—	—	組合式石棺直葬	Ⅲ	—

【凡例】「仿製」三角縁神獣鏡の区分は岩本2003。甲：短甲、竪・革・甲：竪剝板革綴短甲、方・革・甲：方形板革綴短甲、三・革・胃：三角板革綴銜角付胃、竪・革・胃：竪剝板革綴胃、三・革・襟甲：三角板革綴襟付短甲、三・革・甲：三角板革綴短甲、長・革・甲：長方形板革綴短甲、小札・革・甲：小札革綴短甲、横・鉾・甲：横剝板鉾留短甲

す器物である可能性を述べた（大塚1961）。

これらの研究をうけて出土状況を網羅的に分析した山田良三の研究には、注目すべき点が多い。山田は、筒形銅器の延長上にはヤリ先やホコ先が存在することを確認し、この使用方法が基本であったと指摘した（山田1969・2000）。

さらに、杖頭など器物の装飾、ヤリ・ホコなど長柄武器の石突のいずれの場合もあったと考え、本来的に宝器的な機能を備えた器物とみる説もある（玉井1997）。

流通にかんする研究 いっぽう、筒形銅器の流通のあり方にかかわる研究は、近年の韓半島における急激

筒形銅器一覧

舌	共 伴 資 料		
	三角縁神獣鏡	碧 玉 製 品	甲 冑
—	—	—	—
—	—	石釧 6、紡錘車 5、筒形 4	—
青銅	—	車輪石 1、琴柱形 2	—
青銅／なし	—	車輪石 1、石釧 1、紡錘車形 2、 帆立貝形 4	—
—	—	—	—
—	—	—	—
管玉 2	—	—	—
—	—	—	—
青銅／なし	—	鍬形石 1、車輪石 1、石釧 2	方・革・甲
青銅？	—	—	—
青銅	—	石釧 2	—
青銅／青銅？	—	—	方・革・甲
青銅	—	—	—
—	—	紡錘車形 1、琴柱形 4	—
青銅 2／なし 3	「仿製」D群	鍬形石片、車輪石 3、石釧 1、紡錘車形 1、筒形 7	方・革・甲
—	—	—	小札・革・甲
—	—	石釧 1	三・革・甲
—	—	—	—
青銅／鉄	—	石釧片 2	—
—	—	—	—
—	—	—	三・革・冑、豎・革・冑、三・革・甲、長・革・甲
—	—	—	—
—	—	鍬形石 1（採集）	—
不明	—	鍬形石 2、石釧 2、車輪石 1	—
管玉	—	石釧 1	三・革・冑、三・革・甲、長・革・甲
—	—	石釧 1、琴柱形 5	三・革・冑、三・革・襟甲
—	—	—	—
なし	舶載、「仿製」A・C・D群	鍬形石 6、車輪石 1、紡錘車形 3	豎・革・甲
—	—	—	—
青銅	—	—	—
—	—	—	—
—	「仿製」F群	石釧 1	—
—	—	—	—
—	—	紡錘車形 3	—
青銅	—	—	—
青銅／青銅	—	鍬形石 1、筒形、環頭形 1	三・革・甲
鉄	—	—	—
—	—	—	—
—	—	—	甲
青銅	—	—	—
—	—	—	—
—	—	—	—
なし	—	—	三・革・甲
—	—	—	横・鉄・甲
—	「仿製」D群	鍬形石 1、巴形 1	—
—	—	—	—
鉄	—	紡錘車形 1	—
碧玉／なし	—	—	—
青銅	—	—	—
—	—	—	甲
—	—	—	甲

な出土例の増加を背景とする。主な論点としては製作地問題、出土古墳の評価を基礎とする被葬者の政治的位置、および倭王権の政治戦略における筒形銅器の意義の考究などがある。

申敬澈は、日本列島には祖形がない点や、韓半島における出土総数、多量副葬などを根拠に、筒形銅器が金官加耶で製作された可能性を考えた（申1993）。さらに、その後の研究の進展をふまえて、共伴資料を参考に再検討を試み、自身の見解の妥当性を追認した（申2004）。

こうしたなか田中晋作は、畿内地域を主として筒形銅器出土古墳の様相を整理し、古墳時代前期後半以降に新たに台頭する古墳被葬者に保有される傾向が強いと指摘した。また、畿内地域およびその周辺の新興中

小勢力により受容された器物と考えた。そのうえで数量が限られており、副葬が継続しないこと、甲冑との共伴のあり方などから、筒形銅器が韓半島南部で製作された、あるいは同地を経由して日本列島にもちこまれたものである可能性を説いた（田中1996・1998・2005）。福永伸哉も田中とほぼ同様の方法で、筒形銅器出土古墳の性格を検討した。製作地については見解を保留するものの、日本列島における筒形銅器出土古墳の諸要素を検討し、筒形銅器が大和盆地北部、河内平野の新興勢力によって配布された可能性を示した。そのうえで、筒形銅器出土古墳の被葬者像として、「政権内新興勢力との連携をうけた人物」を想定し、その背景に對韓半島交渉の活発化を考慮した（福永1998）。鄭澄元と洪漕植も田中のあげた根拠にくわえ、韓半島における筒形銅器の生産と副葬が日本列島より先行することなどを指摘し、源流が韓半島にあると想定した（鄭・洪2000）。また、井上主税も田中の指摘をふまえつつ（田中1996ほか）、保有状況や出土墳墓のあり方などから、筒形銅器が韓半島製である可能性を考えた（井上2004）。

そのいっぽうで、筒形銅器の製作地を日本列島と考える見方もある。小田富士雄は筒形銅器を「倭政権を背景とする相互贈答品」とみた（小田1993）。山田良三はほかの倭系遺物も韓半島で出土する事実を重視して、一括して韓半島に搬出された可能性を示した（山田2000）。柳本照男も、とくに韓半島における筒形銅器が大成洞古墳群、良洞里古墳群、福泉洞古墳群に限定して出土する点をあげ、そのほかの諸点からも倭の器物が一括して搬出されたという山田の見解を追認している（柳本2001）。

本稿のとり方 筒形銅器の用途を推定するにあたっては、山田良三が指摘するように（山田1969・2000）、古墳における出土状況が重要な鍵になると考える。しかしながら、その副葬のあり方を体系的に整理・把握しようとした研究はこれまでにない。そこで本稿では、筒形銅器の副葬配置を類型化し、さらに細部における異同をも勘案しながら、配置のあり方の実態を探る。そのうえで、出土古墳の規模や分布などから、筒形銅器が墳墓に副葬された背景を考察することとしたい。

2 古墳における筒形銅器の副葬配置と用途・機能

定納1号墳では1点の筒形銅器が出土した。埋葬施設は攪乱によってその多くを破壊されていたが、幸いにも筒形銅器はほぼ原位置と考える状態で確認された。筒形銅器は棺内の遺体頭部付近と想定できる位置の棺底直上において、棺の主軸にほぼ直交して出土した。定納1号墳にみる筒形銅器の棺内副葬は、これまでの確認例のなかでも稀少な存在であり、筒形銅器の用途と機能を考えるうえで重要な事例と評価できる。

現在、われわれが目あたりのとする副葬配置は、埋葬過程の諸段階に配置された副葬品の集積によるものである。埋葬施設や遺体との位置関係をはじめ細部に至るまで配置が共通するということは、埋葬過程のそれぞれの段階における行為に共通性があった可能性を示す。それはけっして偶然によるものではなく、配置にかかわる情報を共有した背景があったとみなしうるであろう。こうした情報の共有が、日本列島でのみみとめられるのか、韓半島をも含めた共通性を保持するのか、あるいは配置類型間には細部における差異が存在するのかという点を具体的に検討することは、筒形銅器を評価するうえでの重要な作業と位置づけられる。

そこで、以下ではひとまず対象を古墳出土例に限定し、筒形銅器の埋葬施設における副葬配置を検討する。韓半島の墳墓における出土状況については、次章でふれることにしたい。

(1) 古墳における筒形銅器の副葬配置類型

まずは、副葬配置を棺内副葬と棺外副葬に大別し、さらに遺体や埋葬施設内での位置関係を重視しながら細分する。なお、筒形銅器の副葬位置については、棺外に副葬したものが転落したなど、現状の出土状況がかならずしも本来の状況を示すわけではない（山田1969・2000、福永1998）。ただし、そうした事例については配置の類型化の後に別途検証することとし、ひとまずは調査時に確認できた出土状況进行分析する（図36）。な

お、検討の対象とするのは、乱掘など後世の攪乱によって、筒形銅器の原位置がそこなわれていないと判断できる例と、配置状況の復原がある程度可能な例である。

①棺内副葬

筒形銅器が棺内から出土した例である。さらに、遺体や埋葬施設との位置関係、筒形銅器の軸の方向から⁽⁴⁾2類型に細分できる。

A類 棺内の遺体付近から出土した例で、筒形銅器の軸が埋葬施設の主軸にたいしてほぼ直交するものである。頭骨や赤色顔料、鏡や玉類などの副葬品から、いずれも遺体の頭部付近と考えられる位置に副葬されたと判断できる。ヤリやホコとの共伴を確認できない例を含む。定納1号墳はこの類型に該当し、ほかには島根県山地古墳第1主体部、山地古墳第2主体部、岡山県浅川3号墳、奈良県池ノ内5号墳がある。

B類 棺内の遺体付近から出土した例で、筒形銅器の軸が埋葬施設の主軸とほぼ揃うものである。鏡や玉類などの副葬品から、遺体の周囲と想定できる位置で出土した。大阪府紫金山古墳、大阪府盾塚古墳、京都府カジャ古墳の3例がある。盾塚古墳では筒形銅器の口縁部を頭位方向に、カジャ古墳と紫金山古墳では足位方向に向けるなど、その向きには違いがあるが、後述するように棺外からの転落による例を含む可能性があるため、その差異が何によるものであるのかを推定することはむずかしい。

②棺外副葬

筒形銅器が棺外から出土した例である。棺との位置関係から、さらに3類型に細分することが可能である。

A類 棺外小口から出土した例である。筒形銅器の軸が埋葬施設の主軸と直交に近く異なるものを含む。いずれも遺体の頭側の小口で出土した。鳥取県生山29号墳、静岡県三池平古墳が該当する。棺内に配置されることの多い銅鏡や石製品など一括して配置する点が特徴である。

B類 棺外棺側から出土した例である。筒形銅器の軸が埋葬施設の主軸とほぼ揃うものがほとんどである。筒形銅器の配置方式のなかでも主体をなす類型であり、広島県大迫山1号墳、岡山県金蔵山古墳中央石槨、奈良県城山2号墳、奈良県タニグチ1号墳、奈良県谷畑古墳、滋賀県安土瓢箪山古墳がこの類型にあたる。筒形銅器はいずれも被葬者の遺体頭部付近と想定される位置に比較的近い場所から出土した。筒形銅器の口縁部を足位方向に向けるものが4例、頭位方向に向けるものが2例と、配置そのもののばらつきは大きい。

C類 棺外・槨外から出土した例である。筒形銅器の軸が埋葬施設の主軸とほぼ揃うものが多い。福岡県立野10号墳、広島県亀山1号墳、京都府尼塚古墳が該当する。いずれも筒形銅器の口縁部を足位方向に向ける。なお、立野10号墳は後述するように器物から解体された可能性が高い。槨外に位置することから、遺体の頭部付近に配置しようとする意図はうかがえず、埋葬施設の上や脇に主軸に沿って配置する。

③その他

このほか、岡山県金蔵山古墳では副槨におさめられた埴製合子、奈良県新沢500号墳では副葬品埋納施設から筒形銅器が出土している。

(2) 副葬配置類型と用途・機能

つぎに分類した各配置類型から筒形銅器の用途と機能をどのように評価することが可能であるかを検討しよう。

副葬配置からみた筒形銅器の用途と機能 副葬配置から器物の用途や機能を考えるにあたって留意しなければならないのが、出土状況が本来の器物の姿を反映するのかという前提である。なぜなら、銅鏡の破碎や、鉄製品の折り曲げ、甲冑の解体といった例が存在するからである。筒形銅器についても、立野10号墳では内部におさめられた青銅製舌が筒形銅器とは遊離して出土しており、副葬時に筒形銅器をとりつけた器物が解体された可能性をうかがえる。また、金蔵山古墳において埴製合子から出土した1点は、破損した特異な形

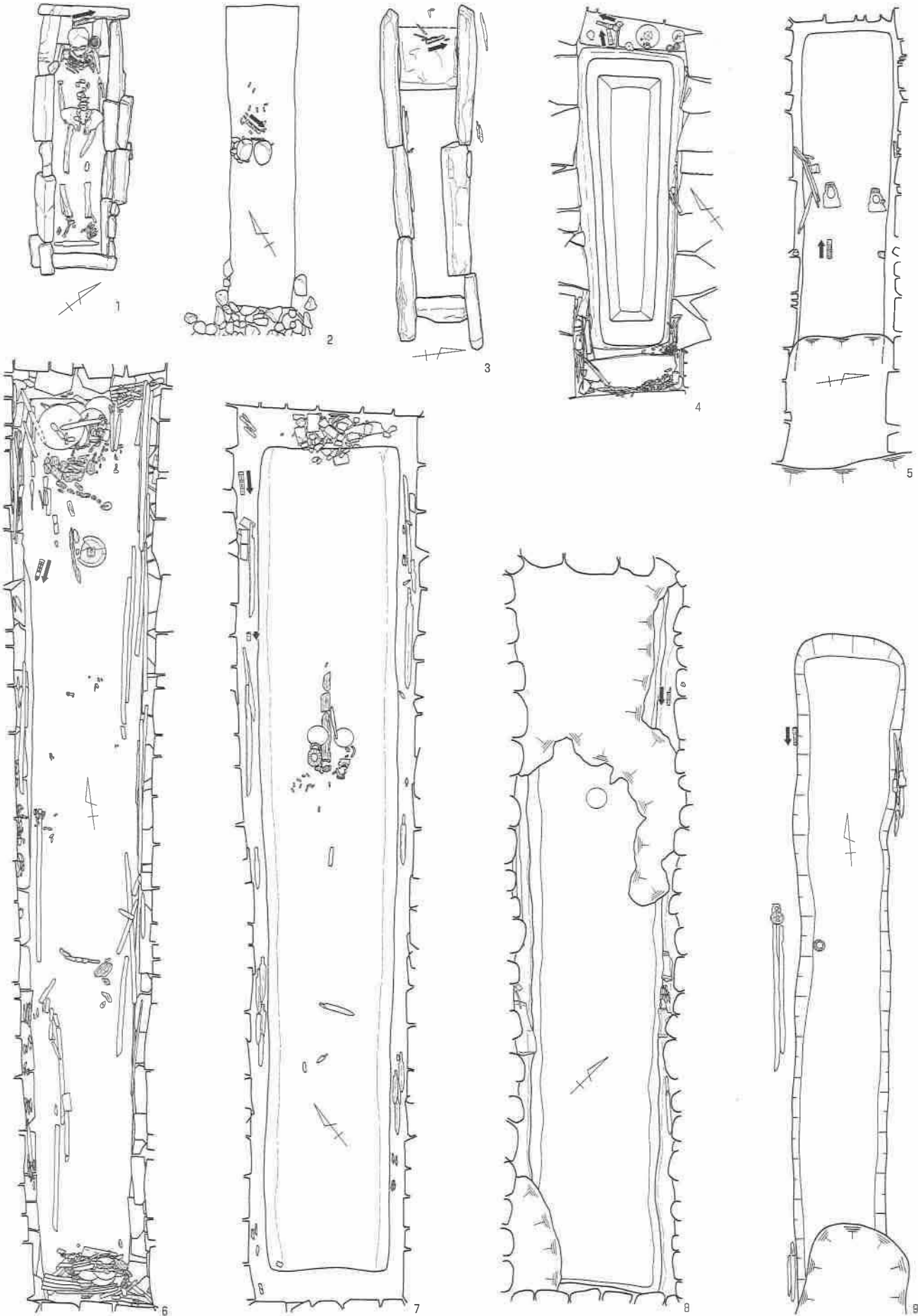
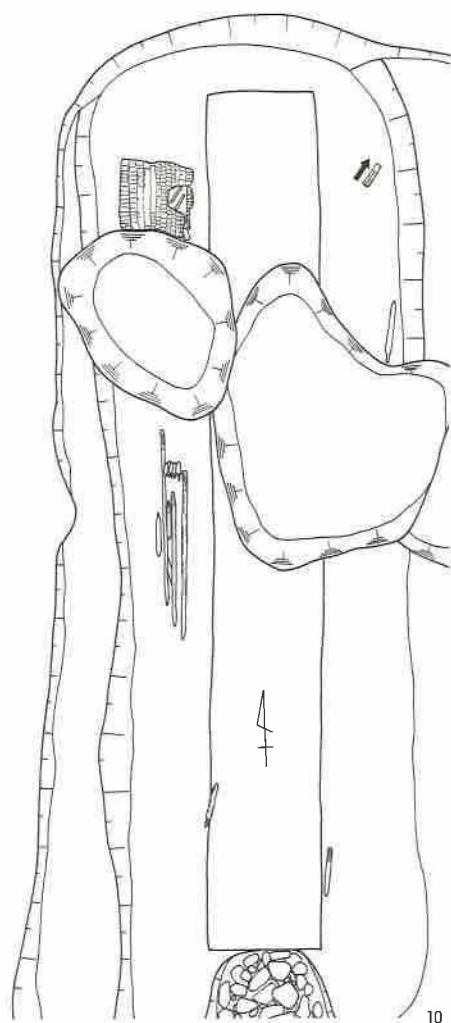
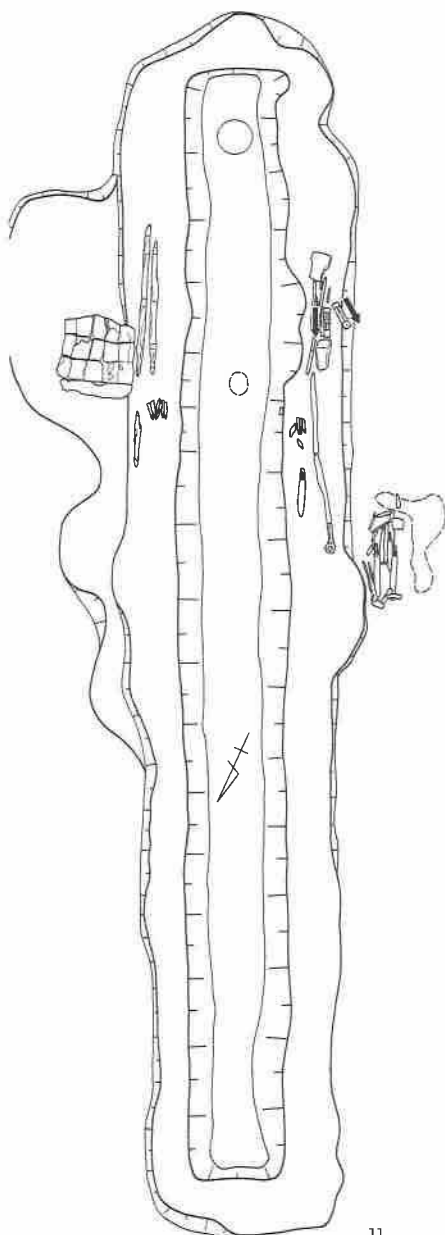


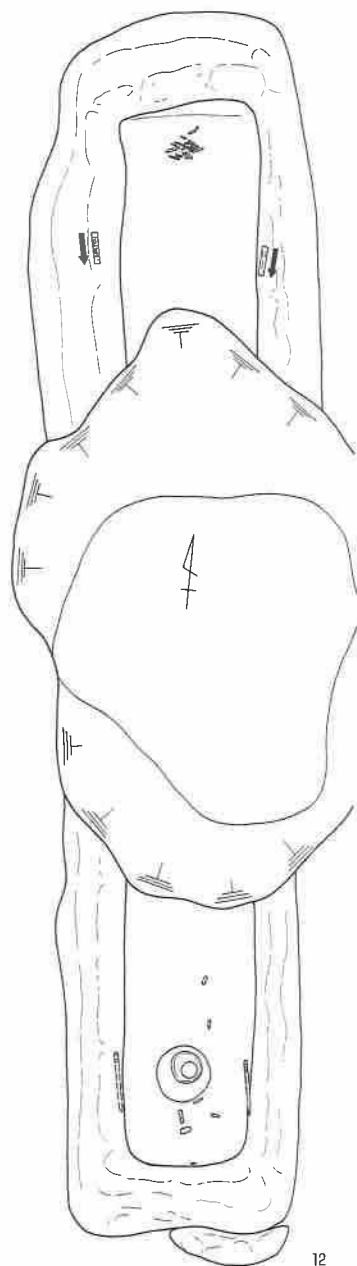
図36 古墳における



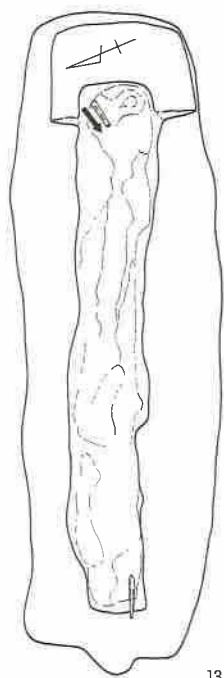
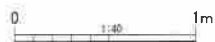
10



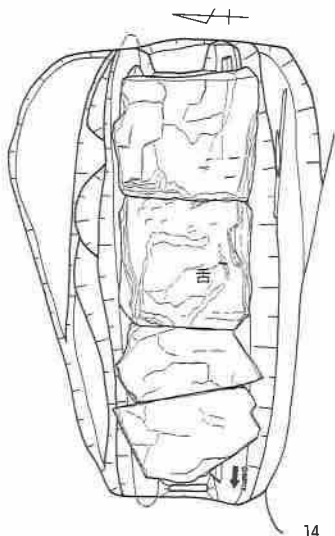
11



12



13



14

- 棺内A類 1. 浅川3号
2. 山地第1主体部
棺外A類 3. 生山29号
4. 三池平
棺内B類 5. カジャ
6. 紫金山
棺外B類 7. 安土瓢箪山
8. 大迫山1号
9. 谷畑
10. 城山2号
11. タニグチ1号
棺外C類 12. 尼塚
13. 亀山1号
14. 立野10号

態のホコとともにおさめられており、副葬される以前に両者は解体されていたようである。ここでとりあげた2例の存在は、配置のあり方から筒形銅器の機能や用途を考える際に、十分な吟味が必要であることを示す。

副葬配置からその機能と用途をもっとも推測しやすい類型は、棺外C類である。棺外C類では、筒形銅器が棺外・槨外から出土しているが、同一の埋葬施設においてほかに同じ出土状況を示すのはヤリ先あるいはホコ先のみである。しかも、両者はほぼ一直線上に並んでおり、筒形銅器がヤリやホコの石突であった可能性(山田1969・2000ほか)をきわめて強く反映する配置と評価できる。

同様に、ヤリやホコの石突と想定できる配置は、棺外B類にも多い。大迫山1号墳、タニグチ1号墳、谷畑古墳、安土瓢箪山古墳では、筒形銅器の口縁部の方向に装具からもヤリ先と判断できる剣形武器をみだせる。なお、棺内B類の紫金山古墳出土例は、赤色顔料の付着が木棺内出土のほかの器物に比べて顕著ではないことから、棺外から転落したものである可能性が高い。本来の位置と想定される場所の延長上にはヤリ先が存在する。

いっぽうで、ヤリ先やホコ先と共伴しない、あるいはヤリ先やホコ先とは位置関係からも対応しないと考えられる配置類型もある。同一埋葬施設においてヤリ先やホコ先の出土していない例が棺内A類にある。山地古墳第1主体部と同第2主体部ではヤリ先やホコ先そのものが確認されていない。こうした例では、ヤリやホコの石突ではない、別の用途と機能を備えていたとみてあやまりなからう。

また、配置からヤリ先やホコ先との対応関係を想定しにくい例として、やはり棺内A類の浅川3号墳と池ノ内5号墳、さらに棺外A類の生山29号墳、三池平古墳をあげうる。さらに、棺内B類の盾塚古墳とカジヤ古墳も位置関係上、ヤリ先やホコ先との対応をみだしがたい。ただし、カジヤ古墳例は紫金山古墳例と同様に、近接して出土したほかの副葬品に赤色顔料が付着するのにたいし、筒形銅器には赤色顔料の付着がみとめられないことから、棺外から転落したものである可能性が高い。また、棺外B類の城山2号墳は口縁部の方向を考慮すると、ヤリやホコといった長柄武器を構成するとみるのが困難な例である。

筒形銅器にみる武器以外の機能 ただし先述したように、十分に考慮しておかねばならないのは、立野10号墳のように筒形銅器が付属した器物を解体したとみなしうる例が存在することである。逆に、解体の可能性を考慮する必要がないのは、ヤリ先やホコ先が伴出しない例に限られる。したがって、ヤリ先やホコ先が同一埋葬施設内で出土しているのであれば、副葬時に長柄の武器を解体した可能性を考慮しなければならない。大半の筒形銅器出土古墳ではヤリ先となる剣形武器やホコ先が出土しているため、十分な吟味が必要なのである。

しかしながら、棺内A類および棺外A類の多くでは、筒形銅器をほかの器物とほぼ同じ位置に一括して配置するという特徴がある。とくに、筒形銅器が銅鏡や石製品などとほぼ同様のあつかいをうけている点はみのがせない。⁽⁶⁾すなわち、筒形銅器が構成した器物に銅鏡や石製品などと同様の宝器的あるいは威信財的な側面が付与されていた可能性を考慮できるのである。また、山地古墳第2主体部、生山29号墳、池ノ内5号墳、定納1号墳から出土した各例で、布に巻かれたような痕跡がみとめられることもそうした性格とかかわりがある。さらに、棺内A類と棺外A類の多くの例が、内部に舌をおさめた状態で出土していることは、これらがことごとく解体されて副葬されたわけではないことを示すと考える。銅鏡の破碎や、鉄製品の折り曲げ、甲冑の解体は、それら器物の副葬例全体のなかでもかなり少数である。にもかかわらず、筒形銅器の付属する器物のみが積極的に解体の対象になったとは考えにくい。むしろ、銅鏡や石製品といったほかの器物ととりあつかいが共通する点、そうした例に布の付着したものが存在する点を重視して、筒形銅器が宝器的あるいは威信財的な側面を付与されるような器物を構成した可能性を示すものと評価したい。

(3) 小 結

以上、日本列島における筒形銅器出土古墳にみる副葬配置のあり方から、筒形銅器がヤリやホコなどの長柄武器の石突であった可能性、長柄武器ではなく宝器的・威信財的な側面が付与される器物を構成した可能性を指摘した。すなわち、筒形銅器はとりつけられる対象によって、異なる性格を有する器物を構成した可能性があるとともに（玉井1997）、その差がおおまかながら副葬配置にもあらわれていると理解できる。ただし、あくまでもヤリやホコの石突として用いられた例が主流であったと考える。

また、ヤリやホコの石突と想定できる配置において、筒形銅器の口縁部の向きに着目すると、口縁部を被葬者の頭位方向に向けるものが1例、足位方向に向けるものが8例を数える。ただし、口縁部が足位方向に向く例のうち、立野10号墳では筒形銅器がともなう長柄武器が解体され、ヤリ先はその切先を刀とともに頭位方向に向けていた。こうした例を頭位方向へ口縁部を向ける例に含めたとしても、筒形銅器を装着した長柄武器は副葬時にその切先を足位方向に向けるものが優位であるという傾向にあることはまちがいない。筒形銅器が被葬者の頭部付近を意識して配置される傾向にある点はこれまでもふれてきたとおりであり、この点が筒形銅器の口縁部の向きをある程度規定する結果になったと考える。その背景には、筒形銅器によって構成される器物が本来的に宝器的な性格をもちうるという点が深くかかわっていたと考える。

長柄武器として副葬されたと想定しうる例には、複数の筒形銅器が出土することもある。実際に発掘調査を経た例が少ないものの、棺の主軸に沿って、複数の筒形銅器を棺や槨の左右にわけて置くものが尼塚古墳の1例、棺や槨からみて同じ側にまとめて副葬するものがタニグチ1号墳と安土瓢箪山古墳の2例を数える。また、金蔵山古墳のようにそれぞれのとりあつかいをまったく異にする例もあり、複数副葬の配置のあり方にばらつきがあることを理解できるだろう。

さらに、長柄武器以外の機能を有する器物を構成したと想定できる配置類型には、棺内A類、棺内B類の一部、棺外A類、棺外B類の一部がある。これらが長柄武器以外の同じ性格をもつ器物を構成した保証はないが、先の長柄武器にともなうと考えられる例と同様に、同じ筒形銅器でありながら、じつに多様な配置のあり方を示す点はみのがせない。多様な機能をもつ可能性を示すとともに、副葬時に多様なとりあつかいをうけた可能性を考慮できる。

また、棺内A類と棺外A類が基本的には小規模な埋葬施設で採用されている点にも留意しなければならない。とくに、棺内空間に副葬品をおさめるスペースが少ないために、必然的に埋葬施設の主軸に直交させて配置する、あるいは鏡や石製品などとともに棺外に配置することになった可能性を考慮しうる。この点は筒形銅器が長柄武器を構成した場合でも同様であり、長さがあるために棺の主軸に沿って配置されたことは容易に理解できる。すなわち、筒形銅器が付属した器物には、ある特定場所に配置しようという強固かつ明確な意図が付与されるのではなく、埋葬施設にあわせて配置方法が変化しえたともみること十分に可能なのである。さらに別のいい方をすれば、銅鏡の副葬配置にみるような、特別なとりあつかいを積極的にうかがうことが困難であるともいえるだろう。⁽⁷⁾

以上分析したように、筒形銅器の副葬配置にはいくつかのパターンがあり、それぞれの類型はおおまかに共通すること、類型の差が用途・機能の違いにむすびつきうること、配置方法に特別なとりあつかいをみいだしにくいことを特徴としてあげることができる。

3 韓半島における筒形銅器の副葬配置

つぎに、韓半島の墳墓において筒形銅器がどのように副葬されていたのかを検討することとしたい。ただし、韓半島の筒形銅器はまとまって出土する例が多いために、かえって出土墳墓の総数は少ない。さらに、

遺体との位置関係をくわしく検討できる例となると、その数はより少なくなる。したがって、以下では代表的な事例に限定して個別に検討をくわえ、そのうえでいかなる傾向にあるのかを明らかにしたい(図37)。

大成洞1号墳 主槨の木槨内より8点が出土した。主軸を東西にとる槨のなかで、7点が北西隅に近接して馬具類とともに出土し、1点が南西隅付近で確認された。南西隅で出土した1点は、軟質器台の脇から出土しており、原位置を保つものである可能性が高い。筒形銅器は槨の主軸に直交しており、ヤリ先やホコ先との関連を想定することはできない。残りの7点については馬具類の隙間や直上から出土した。いずれも槨の主軸方向に軸をとる。これら筒形銅器群の東側にはヤリ先が存在しており、対応関係を想定できる可能性が高い。ただし、7点のうちの4点はヤリ先の存在する東側とは反対方向に口縁部を向ける。2点が接して出土した例と、ヤリ先とこの2点の筒形銅器をむすぶ延長上にある1点が東側に口縁部を向ける。なお、埋葬は人骨から5体以上が想定されており、筒形銅器と被葬者との位置関係を明らかにすることは難しい。

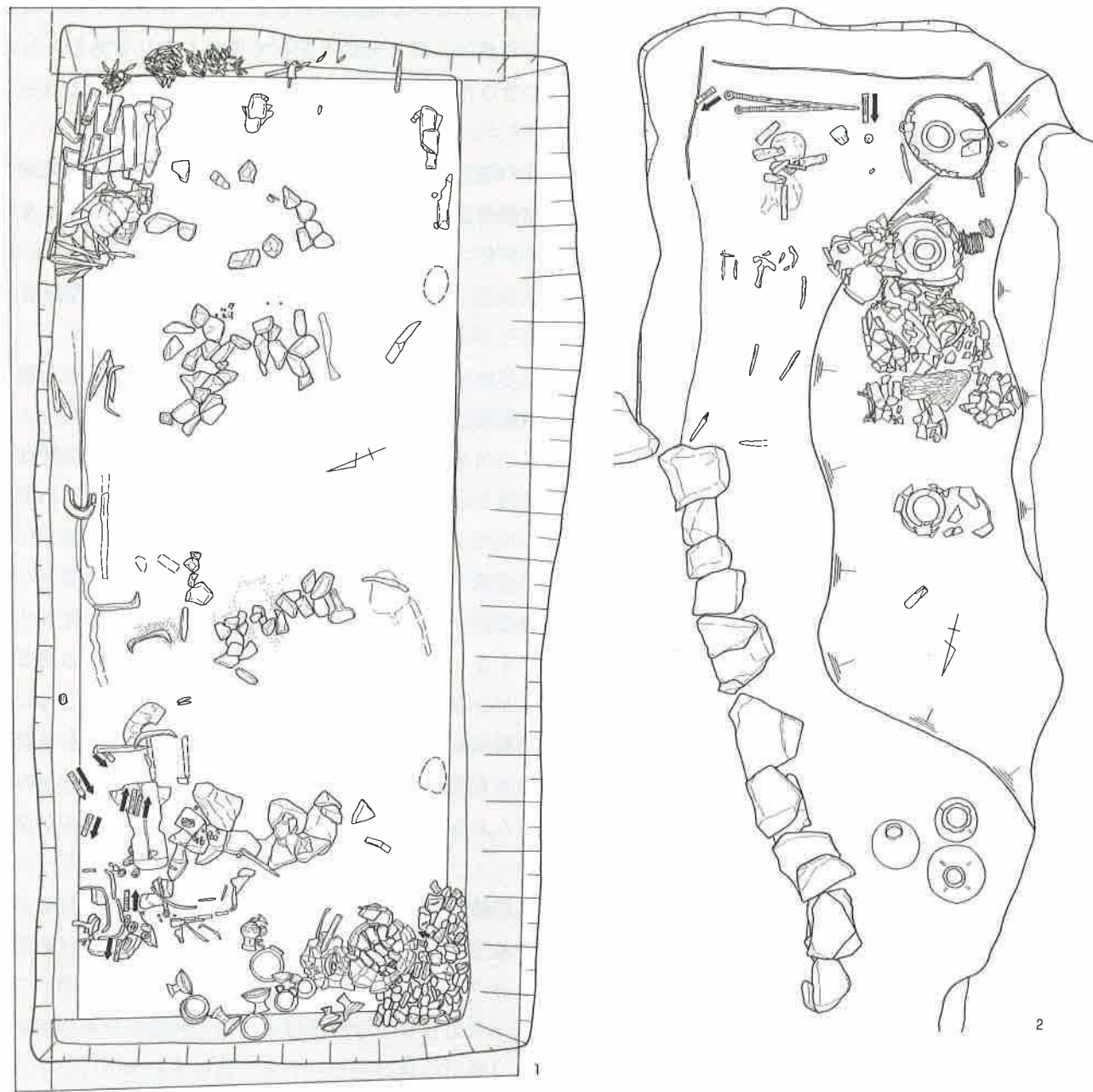
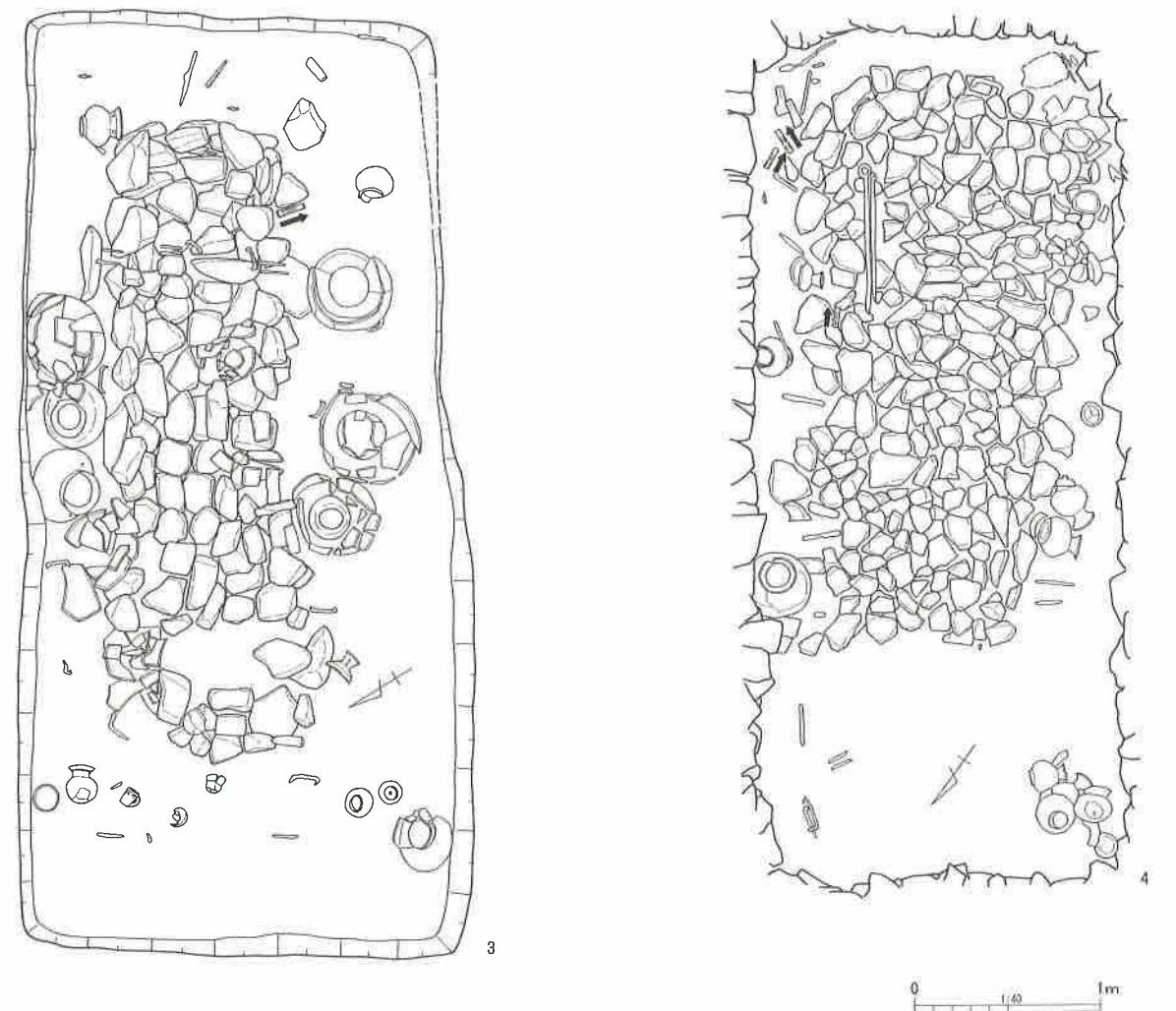


図37 韓半島の墳墓における筒形銅器の副葬配置

大成洞18号墳 木槨内より2点が出土。木槨は南北に主軸をとり、中央よりやや東側に南枕で被葬者が葬られたことが人骨より明らかである。筒形銅器はいずれも軸を南北、すなわち槨の主軸と揃えて、槨内南端付近の遺体頭部近くで出土した。口縁部は被葬者の足元側に向ける。口縁部の延長上にはヤリ先が存在しており、遺体の両脇を筒形銅器が付属する2本のヤリではさむように配置したと復原できる。被葬者との位置関係が把握できる点で重要な調査例といえよう。

良洞里304号墳 主槨の木槨内より3点が出土した。主軸を東西にとる木槨内で筒形銅器はおおむね2ヶ所にわかれて出土した。副葬品の配置などから、被葬者は東枕で葬られた可能性が高い。2点は木槨南東隅、被葬者頭位方向の棺外と想定される場所で軸を木槨の主軸とあわせるような状況で配置されたと想定できる。口縁部は槨の外側に向ける。もう1点は主軸に併行して並べられた鉄刀2点の脇で、口縁部を被葬者の足位方向に向ける。おそらく被葬者の体側に沿って置かれたものであろう。体側に配置された1点はホコ先との



1. 大成洞1号
2. 大成洞18号
3. 良洞里304号
4. 良洞里304号

対応を想定しうるが、ほかの2点についてははっきりしない。

良洞里340号墳 木槨内より1点が出土した。木槨は東西に主軸をとり、棺台と想定される礫敷が確認されている。筒形銅器は礫敷が途切れる位置の南東付近で出土した。筒形銅器の軸を木槨主軸にたいして直交するように配置しており、ヤリ先やホコ先との対応関係をみいだすことのできない副葬例である。

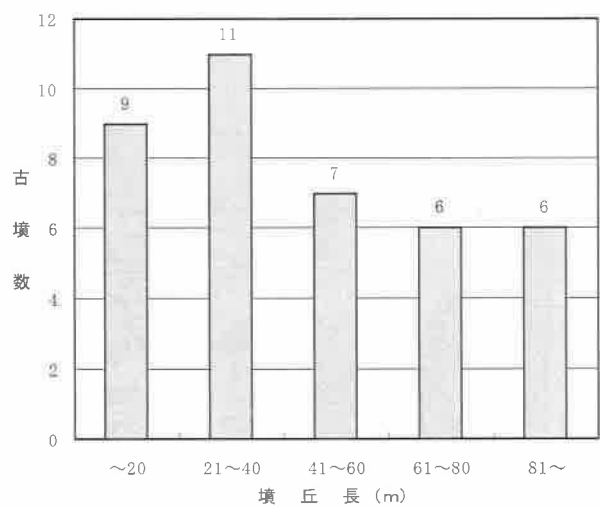
韓半島の墳墓における筒形銅器の副葬配置 以上、きわめて簡単に代表例に限定して出土状況を概観した。その結果、韓半島の墳墓における筒形銅器の配置方法は以下のように整理することが可能である。まず、筒形銅器の軸を埋葬施設の主軸に併行して配置する例と、直交するように配置する例の大きく二つのあり方をみとめうる。主軸に併行して配置する例にはヤリやホコを構成したと想定できる例が含まれるとともに、直交して配置する例にはヤリ先やホコ先との対応関係をみいだせない例が目立つ。ただし、あくまでも主軸に併行して配置する例が主体である。こうした配置と機能の関係は、日本列島の古墳における筒形銅器の副葬配置と共通するものとみなしうる。また、長柄武器を構成すると想定できる例では体側に配置する例が多く、被葬者の頭部付近から筒形銅器が出土する例が顕著である。長柄武器以外の機能を想定できる場合でも、被葬者の頭部付近から出土している例が存在する点は、日本列島の出土例と同様である。ただし、韓半島の筒形銅器出土墳墓の埋葬施設は木槨を基本としており、埋葬施設の構造上、ある程度の空間を確保できるという特徴をもつ。日本列島では、埋葬施設の構造によって筒形銅器の副葬配置が規定された状況をうかがうことができることはすでに先述した。そうした諸点を考慮すれば、被葬者の体側に沿って筒形銅器を配置する例が多い事実は、どちらかといえば日本列島よりも韓半島の方が墳墓における副葬配置の共通性が高いことを示唆するであろう。⁽⁸⁾

4 筒形銅器出土古墳の様相

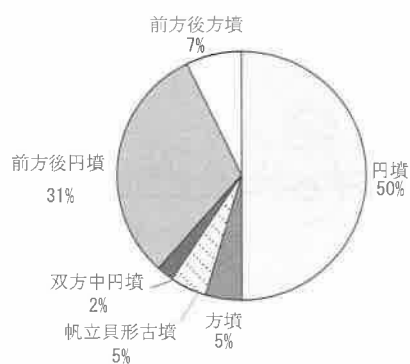
本章では、日本列島における筒形銅器出土古墳の規模や形態、分布、埋葬施設や共伴資料の特徴をあらためて整理することで、出土古墳の様相をうかがってみたい。

(1) 出土古墳の様相

筒形銅器出土古墳の規模・形態 筒形銅器出土古墳の墳長と古墳数の関係をグラフに示す（図38-1）。任



1. 筒形銅器出土古墳の墳丘規模



2. 筒形銅器出土古墳の墳丘形態 [n=42]

図38 筒形銅器出土古墳の規模・形態

意の規模区分を採用しているものの、おおまかな傾向をつかむことは可能と考える。グラフをみると明らかに、20m以下の墳丘規模の小さな古墳をはじめ、80～160mに達するような大型の古墳からも、偏りなく出土している点が注目できる。いっぽう、出土古墳の墳丘形態にはいかなる特徴をみいだせるであろうか(図38-2)。グラフをみると、墳丘形態にかんする限りは、いっけん円墳が優位であるような状況をよみとることができる(福永1998)。ただし、40m以下の墳丘規模では前方後円墳や前方後方墳じたいが少ないという点、出土古墳の半数が40m以下である点を考慮すれば、上述のあり方をただちに全体の傾向とみることはできない。むしろ、古墳の規模と形態の関係、それぞれの全体的な比率を考慮すれば、墳形のばらつきは大きいと理解すべきである。以上のように、筒形銅器は特定の墳丘規模や墳丘形態をもつ古墳から出土するのではなく、小規模墳から大規模墳まで、さまざまな形態をもつ古墳から出土するという特徴をみいだしうであろう。

筒形銅器出土古墳・墳墓の分布 つぎに出土古墳および墳墓の分布をみよう(図39)。日本列島における筒形銅器出土古墳の分布をみると、やや畿内地域に集中する傾向はあるものの、近畿地方から瀬戸内沿岸地方を中心とした広範囲に一定数が分布する状況をよみとることが可能である。これらの地域にくらべると、東日本や九州では出土古墳が極端に少ない。筒形銅器が九州を除く西日本を中心に分布するという点を確認できるであろう。しかも、ある程度分布が密な近畿地方から瀬戸内沿岸地方でも、集中的な出土というよりは全体に広く出土する点が重要と考える。いっぽう、韓半島ではその南部地域、なかでも大成洞古墳群で16点、良洞里遺跡で7点、福泉洞古墳群で12点と、合計43点がきわめて限られた範囲から集中的に出土している(申2004)。日本列島と韓半島の分布をあわせてその特徴をみると、韓半島から瀬戸内沿岸を經由して近畿地方に至るルート of 周囲に一定数の筒形銅器が分布するという状況をうかがえる。そうした状況は、東日本の出土古墳が極端に少ない事実をも考慮すれば、畿内地域に分布の中心を求めることがやや困難であることを示唆すると考える。

筒形銅器出土古墳の埋葬施設 先述したように、古墳出土の筒形銅器の副葬方法が埋葬施設にあわせて変化しえた可能性は十分に考慮できる。筒形銅器を副葬するにあたって、埋葬施設が与えた影響はけっして小さくないと考えることが可能である。

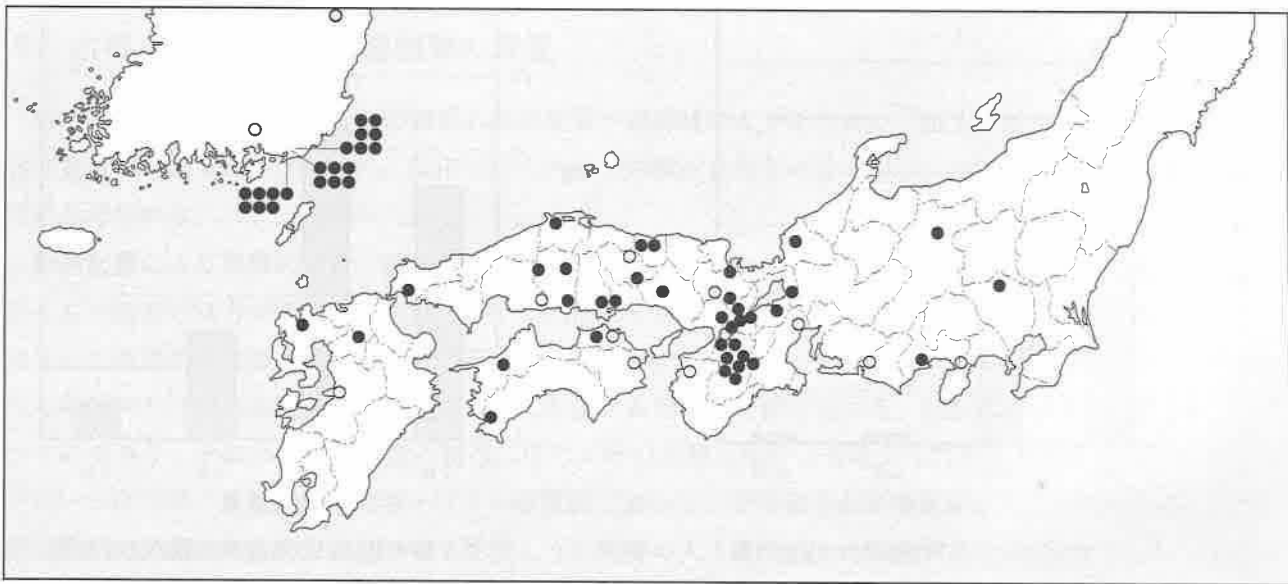


図39 筒形銅器出土遺跡の分布 (○は伝出土地)

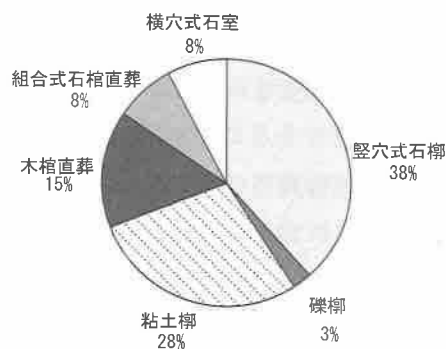


図40 筒形銅器出土古墳の埋葬施設〔n=39〕

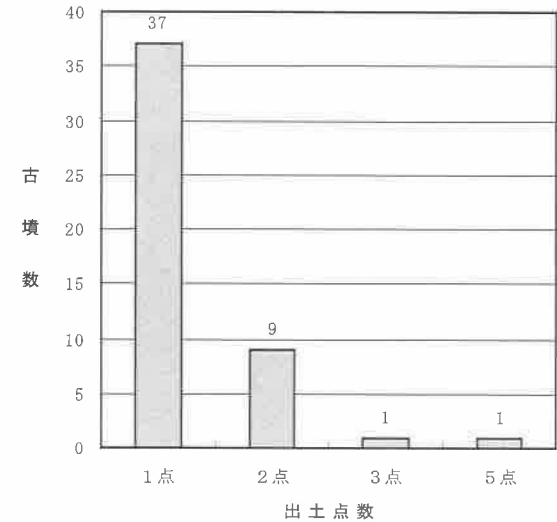
出土古墳の埋葬施設のあり方をみると、竪穴式石槨と粘土槨、木棺直葬が主体である（図40）。こうした傾向は、古墳時代前期後半から中期前半にかけての埋葬施設のあり方とほぼ符合する。横穴式石室から出土した例が若干存在するが、3例のうち2例は伝承によるものである。注目されるのが、筒形銅器出土古墳のなかに、特色ある埋葬施設を採用する例がわずかに存在する点である。佐賀県横田下古墳では初期の横穴式石室、鳥取県生山29号墳では礫敷をもつ組合式石棺を竪穴式石槨におさめ、高知県高岡山1号墳では礫槨が採用される。横田下古墳の横穴式石室については、同種の横穴式石室がこの時期では北部九州にほぼ限定できるあり方を示しており、畿内地域との関係というよりはむしろ韓半島との関係のなかでうみ出されたものとみてよい（柳沢2002）。いっぽう、生山29号墳では底石のない石棺を槨のように構築し、さらにその外側に板石を積み上げて覆う。⁽⁹⁾ 礫敷を有するほかにあまり例のない埋葬施設の構造であり、その系譜を畿内地域との関係のなかでのみとらえることは難しい。また、高岡山1号墳の埋葬施設もほかの古墳にはあまり例をみない礫槨である。

このように筒形銅器出土古墳の埋葬施設は、古墳時代前期後半から中期前半にかけての通有の埋葬施設をまんべんなく網羅するとともに、畿内地域との関係だけではとらえにくい特徴をもつ例や特殊な例をわずかに含む。

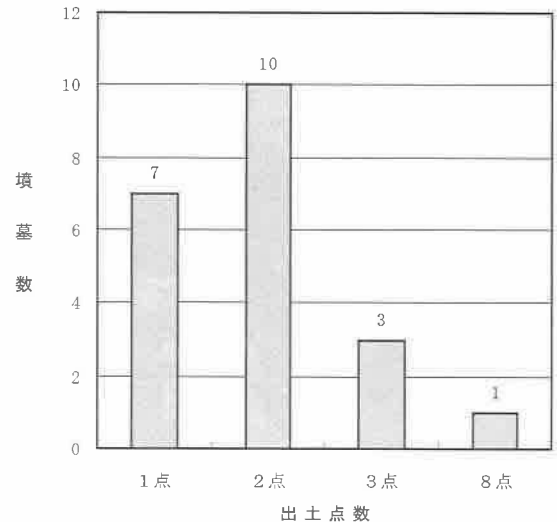
(2) 保有状況と共伴資料にみる特徴

つぎに、筒形銅器の古墳における保有状況と共伴資料にいかなる特徴があるのかを検討しよう。

筒形銅器の保有状況 同一埋葬施設あるいは同一古墳における、筒形銅器の出土点数と古墳数の関係を示す（図41-1）。全体の約77%が1点の出土、約19%が2点の出土であり、3点と5点がともに約2%となる。およそ8割が単数副葬例であり、これが基本的なあり方であったと判断できる。墳丘規模や墳丘形態と出土点数のあいだにも明瞭な関係をうかがうことができず、日本列島において筒形銅器は幅広い階層で均質に受



1. 古墳における筒形銅器の出土点数



2. 韓半島における筒形銅器の出土点数

図41 墳墓における筒形銅器の出土点数

容されうる器物であったとみなしうる。

いっぽう、韓半島では1点の出土が約33%、2点の出土が約48%、3点の出土が約14%、8点の出土が約5%となる（図41-2）。複数副葬例が大半であり、出土した副葬品の内容が豊富な例ほど数多く副葬する傾向にある。日本列島における筒形銅器の保有状況とは大きく様相を異にしており、数量によって格差を設定した状況を想定することが可能である。とりわけ、2本をセットにする例が多い点は注目できるであろう。

三角縁神獣鏡との共伴例 筒形銅器出土古墳では数は少ないものの、4基で三角縁神獣鏡が出土している。さらに、京都府妙見山古墳前方部の西側で筒形銅器が採集されており、前方部粘土槨からの出土品である可能性が高い。いっぽう、香川県石清尾山猫塚古墳から出土した3点については、そもそもこの古墳から出土したことすら確定的ではない。複数の埋葬施設が存在することからも、この古墳から出土したとされる三角縁神獣鏡と同じ埋葬施設で共伴した可能性を支持する材料はない。⁽¹⁰⁾

石清尾山猫塚古墳を除き、妙見山古墳前方部を含めた4基の古墳から出土した三角縁神獣鏡の下限は、いずれも筆者の「仿製」第1段階に相当する（岩本2003）。数量が少ないために断定することはできないが、古い段階の「仿製」三角縁神獣鏡と筒形銅器の共伴はけっして異例ではなかったようである。また、いずれも前方後円墳からの出土であり、墳丘規模もある程度大きいという共通点がある。

甲冑との共伴例 田中晋作が指摘するように、筒形銅器と甲冑の共伴例は多い（田中1998）。検討の対象とした40例のうち、15例で甲冑が共伴する。その割合は35%程度となる。共伴した甲冑の内訳は、3基の古墳から出土した短甲が形式不明であるものの、堅矧板革綴短甲1例、方形板革綴短甲3例、小札革綴短甲1例、三角板革綴衝角付冑3例、堅矧板革綴冑1例、三角板革綴短甲5例、長方板革綴短甲2例、横矧板鋌留短甲1例である。堅矧板革綴短甲・方形板革綴短甲・小札革綴短甲等前期甲冑（橋本1996・1998）との共伴はいずれも畿内地域の古墳に限られるが、これは前期甲冑の分布の問題もあろう。主体となるのは帯金式甲冑（古谷1996）との共伴例であり、7古墳で確認できる。また、広い範囲ではあるが、近畿地方から瀬戸内沿岸地方にかけての範囲に分布が限定される。この現象は、筒形銅器出土古墳のなかでも有力古墳がこれらの地域に分布することを示唆しており、これらの地域が筒形銅器の流通に多大な影響を与えた可能性をうかがわせる。なお、製作技術の違いにもとづく区分ごとにみると（岩本2005b）、A群はいずれも形式が明らかな例では堅矧板・方形板革綴短甲と共伴し、ほとんどのB群は帯金式甲冑と組み合わせる。相対的にA群を古く、B群を新しく位置づけうる。おおよそA群が古墳時代前期後半、B群が古墳時代中期前半に盛行した形式であると考えておきたい。

5 古墳における筒形銅器副葬の背景

前章までの分析によって、筒形銅器の副葬配置や副葬時のとりあつかい、出土古墳のあり方、保有状況や共伴資料の特質を明らかにした。以下ではこれまでの検討結果をふまえつつ、古墳における筒形銅器副葬の背景を考察する。

副葬配置にみる異同の背景 副葬配置の差から、筒形銅器には長柄武器を構成した場合と、武器以外の機能をもつ場合の双方があった可能性はすでに指摘したとおりである。とりわけ、長柄武器を構成したと想定できる配置例では埋葬施設の主軸に併行させて棺外に配置することが多く、武器以外の機能をもつと推測しうる配置例では埋葬施設の主軸に直交させて配置する例が一定数存在する。長柄武器はある程度の長さをもつものであり、それゆえ埋葬施設の構造に応じてその主軸に併行させるように配置することが必然となる。そのいっぽうで、長柄武器とは考えにくい配置例において、筒形銅器が埋葬施設に直交して副葬されるのは、筒形銅器の付属した器物が直交させて配置しうる程度の大きさであった可能性をうかがわせる。⁽¹²⁾ このように筒形銅器が付属した器物は、その大きさや埋葬施設の構造にあわせて、古墳における副葬配置とその方法が

変化しえたという点を確認できる。副葬時の細かなとりあつかいにばらつきがあるという点も、筒形銅器の用途と機能に差があることと無関係ではなかろう。

さらに、韓半島と日本列島の墳墓における筒形銅器の副葬配置には、用途と機能の別にもとづく副葬位置の異同の存在とともに、埋葬施設の構造に応じた配置が採用されるなど、相違点よりも共通点のほうが目立つ。ただし、どちらかといえば、日本列島よりも韓半島の出土例の方が配置にみる共通性は高い。いずれにしても、筒形銅器が付属した器物に、特別な意図にもとづく列島独自の配置方法が採用された状況を考えるのは困難である。

なお、列島出土の長柄武器と想定できる例では被葬者の頭部付近に筒形銅器が位置する例や、武器以外の機能をもつと想定できる例でも被葬者の頭部付近に銅鏡や石製品とともに配置する例が多い。そうした点では、筒形銅器に宝器的な側面をうかがうことが可能である。ただし、同様のあり方を示さない例も一定程度存在しており、被葬者の頭部付近を意識したとみなしうる配置方法を採用しながらも、配置類型にもばらつきのある点を考慮すれば、そこに倭王権の特別な意味づけを想定するのは難しい⁽¹³⁾。被葬者の頭部付近を意識した配置という一定の傾向も、倭王権による影響下で共有されたものとは考えにくい。むしろ、韓半島の影響を受けたものとみておくのが穏当であろう。

古墳における筒形銅器の副葬背景 これまでの本稿の検討結果を整理すると、①副葬配置や副葬時のとりあつかいにみる差異が顕著である、②用途と機能の別にもとづく副葬位置の異同を考慮できる、③どちらかといえば韓半島の出土例の方が日本列島の出土例より副葬配置の共通性が高い、④古墳における副葬配置やその際のとりあつかいにみる異同の背景に、筒形銅器にたいする倭王権の特別な意味づけを想定するのが困難である、⑤列島では幅広い階層に受容された器物と想定できる、⑥西日本のなかでも近畿地方から瀬戸内沿岸地方に広く分散しており、分布の中心を畿内地域に求めることが難しい、⑦出土古墳の埋葬施設にはばらつきがあり、まれに畿内地域との関係のなかのみではとらえにくい埋葬施設をもつものを含む、⑧韓半島とは異なって、列島内の筒形銅器は単数副葬が圧倒的である、⑨列島においては計画的な配布行為を想定しにくい、という9点に集約できる。これらの諸点を整合的にとらえると、すべての筒形銅器が倭王権を媒介とした配布活動によって各地の古墳の被葬者にもたらされたものとは考えにくい。むしろ、近畿地方から瀬戸内沿岸地方を中心とした西日本における交流のなかで広く流通し、各地の古墳の被葬者が個々に入手するといった状況も含めた多様な流通形態⁽¹⁴⁾を想定することも十分に可能であろう。

お わ り に

本稿では、筒形銅器を材料に、その副葬にかかわる諸現象を検討し、筒形銅器が古墳に副葬される背景を考察した。その結果、筒形銅器に複数の機能を想定できること、特定の勢力に意図的に配布したものではなく、幅広い階層の被葬者が入手しえた器物を構成した可能性を説いた。

そのうえで、かならずしも畿内地域との関係によらない、すなわち倭王権を介した配布活動によってすべての筒形銅器がもたらされたとは考えにくい可能性を想定した。

いっぽう、すでに筒形銅器の製作技術にかんしては一定の見通しを提示しているものの(岩本2005b)、これをふまえた分析や考察を試みることができなかった。また、製作地問題についても製作技術面からの検討を経たうえで判断すべきものであることはいうまでもない。さらに、筒形銅器そのものの年代や出土古墳の時期を考慮した検討をおこなうことも必要な作業である。時間的な変化のなかで筒形銅器の流通のあり方が変化した可能性も考慮できるからである。本稿では概括的にしかふれることのできなかった韓半島での筒形銅器のあり方を詳細に検討することも不可欠である。これらの点と、それをふまえた考察については今後の課題とし、機会をあらためて論じることとしたい。

付 記

田中晋作氏には有益なご教示とご高配をいただいた。生山29号墳の出土状況図の掲載に際しては、鳥取市教育委員会の平川誠氏、鳥取市埋蔵文化財センターの谷口恭子氏に格別のご高配を賜った。末筆ながら記して感謝の意を表したい。なお、本稿の作成には平成17年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）を使用した。

註

- (1) 「ヤリ」および「ホコ」の名称と区分については菅谷文則の案にしたがう（菅谷1975）。
- (2) 器物の副葬配置にかかわる情報は、一連の行為ののち埋葬施設を埋め戻すため、きわめて限られた状況下でしか共有されないという側面があると考ええる。
- (3) 表3に掲げた「古墳出土筒形銅器一覧」にとりあげた例を検討の対象とする。なお、筒状で底部が閉塞されていない、奈良県富雄丸山古墳出土例と京都府妙見山古墳出土例については、そのほかの例と製作技術を異にするとみなしうるのでとりあつかわない。また、広島県鳩ノ岡古墳出土例と広島県畑山古墳出土例については広島県馬場谷2号墳例との混乱があるため、これらについても検討の対象から除外する。〔伝〕上野と〔伝〕南山城、〔伝〕郷原古墳については、具体的な所在地が不明のため、本稿で検討の対象とはしないが、参考として示した。なお、このほか出土地不明が7例以上あるが、今回は一覧から除外する。
- (4) 以下の分析で用いる、筒形銅器の軸については、口縁部と底部をむすぶ方向とする。
- (5) いっぽう同じ類型の盾塚古墳出土の筒形銅器も転落によるものであるという指摘があるが（山田2000）、調査者が示す一括したまとまりという認識を重視してほぼ原位置を保つものと考えておく。ほぼ同じ機能を有する銅鈴が接して出土しているのもその傍証となろう。
- (6) 増田逸朗は、埼玉県熊野神社古墳出土の筒形銅器・筒形石製品の数と紡錘車形石製品の数とが一致する点、出土した管玉の法量がメスリ山古墳から出土した玉杖の管玉と一致する点から、熊野神社古墳出土の筒形銅器・筒形石製品と紡錘車形石製品、管玉が玉杖を構成した可能性を指摘する（増田1986）。筒形銅器と紡錘車形石製品の共伴率の高さは、細川晋太郎も指摘している。しかし、細川は紡錘車形石製品が器物を構成する部品ではなく、基本的には単体で器物として成立した可能性を考慮する（細川2004）。
- (7) 銅鏡の副葬配置について、前期中葉以降に埋葬施設の簡略化にあわせて変化した可能性を指摘したことがある（岩本2004）。ただし、距離の離れた古墳間においても特徴的な配置が採用されるとともに、細部のとりあつかいについてもある程度の共通性を保持する点で、筒形銅器とは様相を異にすると考える。前期中葉以降の銅鏡の多様な配置のあり方は特徴的なものであり、しかも複数副葬例に限られる。いっぽう、単数副葬の場合はあくまでも被葬者の頭部付近に配置するのを基本とする。この点も筒形銅器の配置にみるばらつきとの相違点である。
- (8) 井上主税は、韓半島では被葬者の頭部付近に、口縁部を足部方向に向けて配置するといった共通点を指摘する（井上2004）。韓半島における筒形銅器の副葬配置に共通性を指摘する点では本稿と共通するが、その具体的な内容はやや異なる。とくに井上が指摘する筒形銅器の口縁部を足位方向に向けるという共通性は、日本列島でも同様に確認できることは、すでに述べたとおりである。
- (9) 生山29号墳における筒形銅器の出土状況にかんしては、鳥取市埋蔵文化財センターの平川誠氏、谷口恭子氏よりご教示をうけた。
- (10) 阿波・讃岐地域の竪穴式石槨を検討した山本三郎の成果によれば、石清尾山猫塚古墳の中央石槨の年代は前期初頭以降、前期中葉に下らない（山本2002）。中央石槨より筒形銅器や終焉段階の「仿製」三角縁神獸鏡（岩本2005a）が出土したとされるが、石槨そのものの年代と副葬品の年代のあいだに大きな差があり、注意を要する。
- (11) 未調査のため古墳であることが確認されていない例をひとまず含む。
- (12) このことは、棺内A類や棺外A類を除く、ほかの配置類型においても副葬が可能であることを示す。ただし、そう

した状況を明確に把握できる例はほとんど存在しない。

- (13) 筒形銅器がある器物を構成する部品と考えられる以上、器物に付与されるべき意義は筒形銅器ではなく、筒形銅器が構成した器物に与えられるはずである。また、構成する器物の性格が大きく違えば、その器物に与えられる意義も異なると想定できる。ひいては筒形銅器じたいに特別な意義をみいだしえないのは器物を構成する部品であり、多様な性格を有するがゆえのことと考える。
- (14) ただし、筒形銅器が長柄武器以外の機能をもつ器物を構成する例には、あるいは倭王権を介した配布の可能性も想定できるかもしれない。今後の良好な出土例の増加に期待したい。

引用文献

- 井上主税 2004 「金海および釜山地域古墳出土の倭系遺物について」『堀田啓一先生古稀記念 獻呈論文集』堀田啓一先生古稀記念獻呈論文集作成委員会 25－48頁
- 岩本 崇 2003 「「仿製」三角縁神獸鏡の生産とその展開」『史林』第86巻第5号 史学研究会 1－39頁
- 岩本 崇 2004 「副葬配置からみた三角縁神獸鏡と前期古墳」『古代』第116号 早稲田大学考古学会 1－26頁
- 岩本 崇 2005 a 「三角縁神獸鏡の終焉」『考古学研究』第51巻第4号 考古学研究会 48－68頁
- 岩本 崇 2005 b 「筒形銅器の製作技術」『紫金山古墳の研究—古墳時代前期における対外交渉の考古学的研究—』平成14～16年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(2)）研究成果報告書 京都大学大学院文学研究科 305－314頁
- 梅原末治 1921 『佐味田及新山古墳研究』 岩波書店 166－168頁
- 大塚初重 1961 「筒形銅器について」『三池平古墳』庵原村教育委員会 166－172頁
- 小田富士雄 1993 「古墳文化期における日韓交渉—倭と百済・伽耶・新羅—」『伽耶と古代東アジア』新人物往来社 71－100頁
- 小林行雄 1951 『日本考古学概説』 創元選書218 東京創元社
- 申 敬澈 1993 「加耶成立前後の諸問題」『伽耶と古代東アジア』新人物往来社 115－160頁
- 申 敬澈 2004 「筒形銅器論」『福岡大学考古学論集—小田富士雄先生退職記念—』小田富士雄先生退職記念事業会 679－702頁
- 末永雅雄 1941 『日本上代の武器』弘文堂書房 159－160頁
- 菅谷文則 1975 「前期古墳の鉄製ヤリとその社会」『橿原考古学研究所論集 創立35周年記念』奈良県立橿原考古学研究所 315－346頁
- 高橋健自 1910 「近時発見の珍品其三」『考古学雑誌』第2巻第3号 考古学会 66頁
- 田中晋作 1996 『古代国家の黎明—4世紀と5世紀の狭間で—』平成8年度特別展図録 池田市歴史民俗資料館
- 田中晋作 1998 「筒形銅器について」『網干善教先生古稀記念古文化論集』（上） 網干善教先生古稀記念論文集刊行会 495－518頁
- 田中晋作 2005 「筒形銅器について」『日本考古学協会第71回総会研究発表要旨』 日本考古学協会 171－174頁
- 玉井 功 1997 「メモ・筒形銅器の用途とその意味」『伊達先生古稀記念古文化論叢』伊達先生古稀記念古文化論叢刊行会 239－245頁
- 鄭澄元・洪潛植 2000 「筒形銅器研究」『福岡大学総合研究所報』第240号（総合科学編第3号） 福岡大学総合研究所 45－56頁
- 鳥居龍蔵 1888 「阿波國二古墳ノ記」『東京人類學會報告』第17号 東京人類學會 254－258頁
- 橋本達也 1996 「古墳時代前期甲冑の技術と系譜」『雪野山古墳の研究』考察篇 雪野山古墳発掘調査団 255－292頁
- 橋本達也 1998 「竪矧板・方形板革綴短甲の技術と系譜」『青丘学術論集』第12集 財団法人韓国文化研究振興財団 47－76頁

- 福永伸哉 1998 「対半島交渉から見た古墳時代倭政権の性格」『青丘學術論集』第12集 財団法人韓国文化研究振興財団 7－26頁
- 古谷 毅 1996 「古墳時代甲冑研究の方法と課題」『考古学雑誌』第81巻第4号 日本考古学会 58－85頁
- 細川晋太郎 2004 「前期古墳副葬紡錘車形石製品の性格」『古文化談叢』第51集 九州古文化研究会 31－66頁
- 増田逸朗 1986 「4. 副葬品について」『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県県史編さん室 196－204頁
- 三木文雄・小林行雄 1959 「伝統工芸と新興工芸 装身具の変遷」『世界考古学大系』日本Ⅲ 古墳時代 平凡社 105－124頁
- 村井嘉雄 1956 「武蔵国川田谷熊野神社境内所在の古墳」『考古学雑誌』第41巻第3号 日本考古学会 51－60頁
- 森本六爾 1929 「筒形銅器概観と本古墳発見品」『川柳村將軍塚古墳の研究』岡書院 68－73頁（1943「筒形銅器について」『日本考古学研究』桑名文星堂 406－413頁に再録）
- 柳沢一男 2002 「4 横穴式石室の検討」『鋤崎古墳—1981～1983年調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第730集 福岡市教育委員会 110－114頁
- 柳本照男 2001 「金海大成洞古墳群出土の倭系遺物について」『久保和士君追悼考古論文集』久保和士君追悼考古論文集刊行会 203－218頁
- 山田良三 1969 「筒形銅器考」『古代学研究』55号 古代学研究会 22－35頁
- 山田良三 2000 「筒形銅器の再考察1999」『橿原考古学研究所紀要 考古学論攷』第23冊 奈良県立橿原考古学研究所 1－43頁
- 山本三郎 2002 「阿讃地域の長大型竪穴式石室の出現について」『論集 徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会 471－487頁

遺跡文献

群馬

〔伝上野〕

- 森本六爾 1929 「筒形銅器概観と本古墳発見品」『川柳村將軍塚古墳の研究』岡書院 68－73頁

埼玉

〔熊野神社〕

- 村井嘉雄 1956 「武蔵国川田谷熊野神社境内所在の古墳」『考古学雑誌』第41巻第3号 日本考古学会 51－60頁

長野

〔川柳將軍塚〕

- 森本六爾 1929 「筒形銅器概観と本古墳発見品」『川柳村將軍塚古墳の研究』岡書院 68－73頁

静岡

〔三池平〕

- 内藤晃・大塚初重(編) 1961 『三池平古墳』庵原村教育委員会

〔根堅向野10号〕

- 梅原末治 1933 「讃岐高松石清尾山石塚の研究」『京都帝國大學文學部考古學研究報告』第12冊 刀江書院

- 静岡縣 1930 『静岡縣史』第1巻 445－452頁

- 静岡県 1992 『静岡県史』資料編3 考古3 719頁

〔御蔵上〕

- 静岡縣 1931 『静岡縣史』第2巻 715－718頁

福井

V 研究

〔稲荷山〕

齊藤 優 1960 『足羽山の古墳』福井県郷土史懇談会

福井市 1990 『福井市史』資料編 1 考古

三重

〔四日市市小牧〕

岩野見司 1956 『考古学上からみた北伊勢』三岐鉄道株式会社

滋賀

〔安土瓢箪山〕

梅原末治 1938 『安土瓢箪山古墳』滋賀県史蹟調査報告第7冊 滋賀県

〔定納1号墳〕

本書

奈良

〔谷畑〕

関西大学考古学研究室(編) 1974 『谷畑古墳』奈良県宇陀郡榛原町教育委員会

〔タニグチ1号〕

河上邦彦・西藤清秀 1996 『タニグチ古墳群(付タニグチ墳墓群)発掘調査報告』高取町文化財調査報告第17冊

高取町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所

〔西浦〕

梅原末治 1922 「大和御所付近の遺蹟研究」『歴史地理』第39巻第4号 日本歴史地理学会 13-23頁

森本六爾 1943 「筒形銅器について」『日本考古学研究』桑名文星堂 406-413頁

〔池ノ内5号〕

菅谷文則 1973 「池ノ内5号墳」『磐余・池ノ内古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第28冊 奈良県教育委員会 56-87頁

〔新沢500号〕

網干善教・伊達宗泰・森浩一・山田良三・猪熊兼勝・堀田啓一・寺沢知子・菅谷文則 1981 「500号墳(茶臼塚古墳)」『新沢千塚古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第39冊 奈良県教育委員会 23-78頁

〔城山2号〕

白石太郎・前園美知雄 1974 『馬見丘陵における古墳の調査』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第29冊 奈良県教育委員会

〔斑鳩大塚〕

北野耕平 1958 「斑鳩大塚古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第10輯 奈良県教育委員会 43-54頁

〔富雄丸山〕

泉森皎(編) 1973 『富雄丸山古墳発掘調査報告』奈良県文化財調査報告書第19集 奈良県教育委員会

京都

〔カジャ〕

坪倉利正・杉原和雄(編) 1972 『カジャ古墳発掘調査報告書』京都府峰山町文化財調査報告第1集 峰山町教育委員会

〔中畷〕

森下浩行 1990 「＜付記＞中畷古墳」『園部垣内古墳』園部町教育委員会 11-12頁

〔穴太31号〕

亀岡市史編さん委員会(編) 2000 『新修亀岡市史』資料編第1巻 亀岡市
〔尼塚〕

山田良三 1969 「尼塚古墳発掘調査報告」『立命館文学』第289号 立命館大学人文学会 26－64頁
城陽市史編さん委員会(編) 1999 『城陽市史』第3巻 城陽市役所
山田良三 2005 『尼塚古墳 付宇治一本松古墳』尼塚古墳刊行会

〔美濃山大塚〕
梅原末治 1919 「美濃山ノ古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第2冊 京都府 83－91頁

〔妙見山〕
梅原末治 1921 「大枝村妙見山古墳ノ調査」『京都府史蹟勝地調査會報告』第3冊 京都府 51－66頁
梅原末治 1955 「山城における古式古墳の調査」『京都府文化財調査報告』第21冊 京都府教育委員会
向日市文化資料館 2004 『向日丘陵の前期古墳』開館20周年記念特別展示図録

〔伝南山城〕
森本六爾 1929 「筒形銅器概観と本古墳発見品」『川柳村將軍塚古墳の研究』岡書院 68－73頁

大阪
〔盾塚〕
末永雅雄(編) 1991 『盾塚 鞍塚 珠金塚古墳』由良大和古代文化研究協会

〔東車塚〕
奥野和夫・小川暢子 2000 『交野東車塚古墳〔調査編〕』交野市埋蔵文化財調査報告1999－I 交野市教育委員会

〔伝赤塚山〕
武藤誠 1977 「中井俊顕輯『集古群類』について」『兵庫県の古社寺と遺跡』武藤誠先生古稀記念会 531－548頁

〔紫金山〕
上原真人・吉井秀夫・阪口英毅・森下章司ほか 2005 『紫金山古墳の研究—古墳時代前期における対外交渉の考古学的研究—』平成14～16年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書 京都大学大学院文学研究科

和歌山
〔伝岩橋〕
田澤金吾 1922 『和歌山県史蹟調査報告』第1 岩橋千塚第一期調査 和歌山県

兵庫
〔松田山〕
龍野市史編纂専門委員会(編) 1984 『龍野市史』第4巻 龍野市
太子町史編集専門委員会(編) 1989 『太子町史』第3巻 太子町

徳島
〔勢見山〕
鳥居龍蔵 1888 「阿波國二古墳ノ記」『東京人類學會報告』第17号 東京人類學會 254－258頁

香川
〔石清尾山猫塚〕
梅原末治 1933 『讃岐高松石清尾山石塚の研究』京都帝國大學文學部考古學研究報告第12冊 刀江書院
〔吉岡神社〕

香川県教育委員会 1983 『新編香川叢書 考古篇』
日本考古学協会昭和58年度大会香川県実行委員会(編) 1983 『香川の前期古墳』

愛媛

〔吹上の森 1 号〕

相田則美 1984 「愛媛県伊予市吹上の森 1 号墳の出土遺物」『「社会科」学研究』第 8 号 「社会科」学研究会 68－73頁

高知

〔高岡山 1 号〕

山本哲也 1985 『高岡山古墳群発掘調査報告書』高知県教育委員会

岡山

〔金蔵山〕

西谷眞治・鎌木義昌 1959 『金蔵山古墳』倉敷考古館研究報告第 1 冊 財団法人倉敷考古館

〔浅川 3 号〕

内藤善史(編) 1998 『高下遺跡 浅川古墳群ほか 榎原古墳群 根岸古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告123 建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会

〔四つ塚 1 号〕

近藤義郎 1953 『蒜山原―その考古学的調査―』岡山県教育委員会

〔岡高塚〕

今井堯 1963 「美作勝央町琴平山古墳」『古代古備』第 5 集 古代古備研究会 21－24頁

倉林眞砂斗・澤田秀実(編) 2000 『美作の首長墳 墳丘測量調査報告』吉備人出版

〔郷原〕

森本六爾 1929 「筒形銅器概観と本古墳発見品」『川柳村将軍塚古墳の研究』岡書院 68－73頁

広島

〔大迫山 1 号〕

川越哲志(編) 1989 『広島県比婆郡東城町 大迫山第 1 号古墳発掘調査概報』広島県東城町教育委員会・広島大学考古学研究室

東城町史編纂委員会(編) 1993 『東城町史』第 1 巻 自然環境・考古・民俗 資料編 東城町

〔馬場谷 2 号〕

福井万千 1977 『三原市史』第 1 巻 原始・古代編 636－639頁

〔亀山 1 号〕

桑原隆博(編) 1983 『亀山遺跡―第 2 次発掘調査概報―』広島県教育委員会

〔三玉大塚〕

森本六爾 1929 「筒形銅器概観と本古墳発見品」『川柳村将軍塚古墳の研究』岡書院 68－73頁

桑原隆博・嶋田滋・伊藤実・田邊俊 1983 『三玉大塚―調査と整備―』広島県双三郡吉舎町教育委員会

〔鳩ノ岡〕

内藤晃・大塚初重(編) 1961 『三池平古墳』庵原村教育委員会

山田良三 1969 「筒形銅器考」『古代学研究』55号 古代学研究会 22－35頁

福井万千 1977 『三原市史』第 1 巻 原始・古代編 636－639頁

〔畑山〕

山田良三 1969 「筒形銅器考」『古代学研究』55号 古代学研究会 22－35頁

山口

〔長光寺山〕

中司照世・小野忠熙(編) 1977 『長光寺山古墳』山陽町教育委員会

桑原邦彦・岩崎仁志 1984 「長光寺山古墳測量調査と若干の遺物」『考古学ジャーナル』No233 ニュー・サイエンス社 25－27頁

鳥取

〔西浦山〕

亀井熙人 1964 「筒形銅器」『郷土と科学』第10巻第1号 鳥取県立科学博物館 6頁

〔生山29号〕

鳥取市教育委員会 1984 「生山古墳群発掘調査現地説明会資料Ⅱ」『鳥取市の遺跡』号外

鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団 1989 『津ノ井遺跡群 鳥取新都市整備事業に伴う発掘調査』

山陰考古学研究集会 2002 『第30回山陰考古学研究集会資料集 山陰の前期古墳』

島根

〔山地〕

川上稔 1986 『山地古墳発掘調査報告書』出雲市教育委員会

出雲市教育委員会(編) 1988 『出雲市埋蔵文化財調査報告書』第1集 出雲市教育委員会

出雲市教育委員会(編) 1989 『出雲市埋蔵文化財調査報告書』第2集 出雲市教育委員会

福岡

〔立野10号〕

児玉真一(編) 1984 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—5—甘木市所在立野遺跡の調査』福岡県教育委員会

佐賀

〔横田下〕

松尾禎作 1931 「横田下古墳」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第10輯 佐賀県教育委員会 63－84頁

熊本

〔清水〕

角田政治 1918 「三角町の古墳」『熊本県史蹟調査報告』第1回 熊本県教育会史蹟調査部

大韓民国

〔大成洞1・2・11・15・18・39号〕

申敬澈・金宰佑 2000a 『金海大成洞古墳群Ⅰ』慶星大学校博物館研究叢書第4輯 慶星大学校博物館

申敬澈・金宰佑 2000b 『金海大成洞古墳群Ⅱ』慶星大学校博物館研究叢書第7輯 慶星大学校博物館

申敬澈 2004 「筒形銅器論」『福岡大学考古学論集—小田富士雄先生退職記念—』小田富士雄先生退職記念事業会 679－702頁

〔良洞里1053・04・321・331・340・352・443・447号〕

林孝澤・郭東哲 2000 『金海良洞里古墳文化』東義大学校博物館学術叢書7 東義大学校博物館

申敬澈 2004 「筒形銅器論」『福岡大学考古学論集—小田富士雄先生退職記念—』小田富士雄先生退職記念事業会 679－702頁

〔福泉洞38・42・60・64・71・73号〕

釜山大学校博物館 1996 『東萊福泉洞古墳群Ⅲ』釜山大学校博物館研究叢書第19輯

申敬澈 2004 「筒形銅器論」『福岡大学考古学論集—小田富士雄先生退職記念—』小田富士雄先生退職記念事業会 679－702頁

挿図出典

- 図36 1 浅川3号（内藤編1998、97頁―第8図を改変トレース） 2 山地第1主体部（川上1986、15頁―図6を改変トレース） 3 生山29号（鳥取市教育委員会提供図面を改変トレース、なお改変・情報の取捨選択についての責はすべて岩本にある） 4 三池平（内藤・大塚編1961、131頁―第37図を改変トレース） 5 カジヤ古墳（坪倉・杉原編1972、11―12頁―第5図を改変トレース） 6 紫金山（上原・吉井・阪口・森下ほか2005、119頁―第55図を改変トレース） 7 安土瓢箪山（梅原末治1938、図版第13を改変トレース） 8 大迫山1号（川越編1989、9―14頁を改変トレース） 10 谷畑（関西大学考古学研究室編1974、12頁―第7図を改変トレース） 11 城山2号（白石・前園1974、77―78頁―第61図を改変トレース） 12 タニグチ1号（河上邦彦・西藤1996、図5を改変トレース） 13 尼塚（山田2005 20頁―第6図を改変トレース） 14 亀山1号（桑原編1983、8頁―第4図を改変トレース） 15 立野10号（児玉編1984、56頁―第46図を改変トレース）
- 図37 1 大成洞1号（申・金2000a、90頁―図面15を改変トレース） 2 大成洞18号（申・金2000b、48頁―図面15を改変トレース） 3 良洞里340号（林・郭2000、170頁―図面47を改変トレース） 4 良洞里304号（林・郭2000、175頁―図面52を改変トレース）
- 図38 1 岩本作成 2 岩本作成
- 図39 岩本作成
- 図40 岩本作成
- 図41 1 岩本作成 2 岩本作成

補記

脱稿後に、大阪府羽曳野市庭鳥塚古墳で2点の筒形銅器が出土したという情報を得た。庭鳥塚古墳における筒形銅器の出土状況や出土古墳の形態や規模も、筒形銅器の副葬を考えるうえで重要な事例となるであろう。

羽曳野市教育委員会2005『大阪府羽曳野市東阪田所在 庭鳥塚古墳現地説明会資料』